

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



大同の緑化協力の基地・環境林センターでは、井戸に貯水槽をつけるなど整備がすすんでいる

Contents

訪日団がやってきます!	P 2
2002年の大同	P 3
大同で、また会いましょう~夏のWT報告~	P 4
関東ランチから	P 7

2002.9

87

訪日団がやってきました！

～報告会等、ご参加ください～

前回（第3回）の訪日団が99年の秋。ずいぶん間があいたし、久しぶりに訪日団を招きたいと準備をすすめてきましたが、日程と参加者が決まりました。今回は、緑化の意義を県レベルまで徹底するために、各県の責任者にも参加してもらいます。受け入れに際しては、北海道大学天塩研究林はじめ関係各所にご協力をいただきます。GEN会員・協力者のみなさまも、ぜひご協力をお願いします（内容は後述）。

【日程（予定）】

- 10月22日（火）関西国際空港着
- 23日（水）関西で研修
- 24日（木） "
- 25日（金）観光、ホームステイ
- 26日（土）報告会、交流会
- 27日（日）札幌経由で音威子府へ
- 28日（月）北大天塩研究林で研修
- 29日（火） "
- 30日（水）札幌へ移動
- 31日（木）東京へ移動
- 11月 1日（金）表敬訪問

- 2日（土）観光、報告会、交流会
- 3日（日）成田国際空港から帰国

【参加者】

- 邢 斌（大同市青年連合会主席）
- 郝軍生（ " 副主席）
- 孫日斌（陽高県共産党委員会書記）
- 高 瑛（磁区共産党委員会副書記）
- 趙亞雄（靈丘県共産党委員会副書記）
- 武春珍（緑色地球ネットワーク大同事務所所長）
- 魏生学（ " 副所長）
- 侯 喜（ " 技術顧問）
- 王 萍（ " 通訳）

【大募集！】

1. 25日の観光案内ボランティア、およびホームステイ受け入れ家庭を募集します。観光といっても、いまのところは市内観光とウインドウショッピング程度と考えています。ホームステイは、2～3人ずつのグループに分かれます。大阪（梅田）から1時間以内程度のご家庭を希望。中国語はわからなくてもけっこうです。詳しくはGEN事務所までお問い合わせください。

ださい。
2. 関西での研修は、六甲山、農協、植物園等を考えていますが、まだ確定していません。同行を受け入れられる場合もありますので、同行を希望する方はGEN事務所までご連絡ください。

【参加してください！】

報告会（大阪会場）

- 日時：10月26日（土）15時～19時
- 場所：大阪弥生会館（大阪市北区芝田2-4-53、TEL. 06-6373-1841 JR「大阪」駅、地下鉄・阪急「梅田」駅徒歩5分）
- 15時～17時 報告会（入場無料）
- 17時～19時 懇親会（会費5,000円）
- 報告会・懇親会参加申込み：10月21日までにGEN事務所まで
- 東京での詳細は未定です。決まり次第、ホームページでお知らせいたします。インターネットを使っておられない方は、恐れ入りますが10月に入ってからGEN事務所までお問い合わせください。

写真展『中国黄土高原・砂漠化する大地と人びと』

広島と岡山で開催

昨年、京都、名古屋、大阪で合計7～8万人の方がたに見ていただき好評だった写真展、『中国黄土高原・砂漠化する大地と人びと』が、広島と岡山で開催されます。農業・農村を撮り続けてきた橋本紘二さんならではの、黄土高原の農村の暮らしをありのままに写し取った作品ばかりです。

広島、岡山のみなさん、この機会にぜひ迫力たっぷりの作品を見にお立ち寄りください。

【広島会場】

- 期間：9月20日（金）～26日（木）
- 10時～18時
- 場所：JR広島駅 新幹線口1階 みどりの窓口前

【岡山会場】

- 期間：9月30日（月）～10月6日（日）10時～18時

- ：場所：JR岡山駅2階コンコース 女神の広場

入場無料

主催：JR西日本

協力：特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

写真集『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』

写真・文＝橋本紘二／東方出版／A4判／208ページ／日本図書館協会選定図書／6,000円＋税

GENでも取り扱っています。特別価格（送料込み）6,000円。お申し込みはGEN事務所まで。

助成・ご寄付 ありがとうございます

国土緑化推進機構『緑の募金』から、270万円の助成が決まりました。国際ソロプチミスト大阪から、100万円の寄付をいただきました。

お詫び

先月号で、会員総会記念対談『日中環境協力を語る』の詳しい内容をホームページに掲載すると予告しましたが、まとめの作業が遅れて、まだ掲載できていません。できるだけ早く掲載しますので、もうしばらくお待ちください。





2002年の大同 ～牛馬の年は豊作になる～

旱魃の年のあとに……

2001年の大同は「100年に1度」といわれる大旱魃で、大同県などでは年間降水量が250mm。農民は「自然災害は怖いけど、より怖いのは災害が連続することだ」といいます。2002年の4月に少し雨がふったら、「牛馬の年は豊作になる」と口々にいいました。ことは馬年です。いいほうに考えないと、やってられない。

7月にいってみると、なるほど、いいようです。雨も去年よりはずっと多い。大同県と南郊区（センター）の1～7月の降水量は、220.5mmと344.5mm。去年の同時期は125.4mmと156.2mmでした。日本の感覚だと、わずかなものですけど。

カササギの森では

春に植えたマツの苗は、多くのプロジェクトで活着率90%以上をキープしています。カササギの森で初めて挑戦した何種類かの広葉樹もちゃんと活着



カササギの森の谷に茂ったポプラやヤナギの木が種を落とし、実生の苗が生えてきている

しました。なかでも期待しているのはナラです。2001年の春、少しだけ試験的に植えたものが、越冬に成功しました。でも、土がやせているから、生育は遅い。環境林センターで3年育てたナラの苗をこの春に植えたら、よく着きました。移植に強そうなので、苗畑であるていど大きくしてから植えるのがよさそうです。

例外的によく育たなかったのが、イブキ（桧柏）の大苗。土が凍結しているあいだに、根に土をつけて運び、ていねいに植えたんですけど、結果は無残。ことしの春のあの強風に揺さぶられたんです。こういうことは、経験を積み上げるしかありません。

草花や実生苗が育ちはじめた

ヒツジの放牧を排除したことで、敷地内にお花畑ができたのは驚きです。朝露をおびたヒエンソウ（デルフィニウム）の紫の花は、じつに魅力的。カスミソウのような小さな白い花が全面をおおいましたが、セキチクのなかまだそうです。マツムシソウ、カラマツソウ、リンドウなども増えました。

カササギの森の谷の底に、ポプラ、ヤナギなどの小さな苗が密生しました。以前は、生えてもヒツジに食べられたでしょう。こういう光景にてあうと、いろいろな方法を試したくなります。

この地方のパイオニアはシラカ

バヤマナラシだそうです。数は少なくてもいいから、大きめの木を移植してみる。シードソース＝種の供給源にするわけです。立花代表が以前から主張していました。

隠れていた森

南郊区で新しい発見がありました。環境林センターから車で30分ほどのところ。石灰岩の山で、ふもとにセメント工場があり、石を切り出しています。なんとその奥がおもしろい。

数は少なく、樹高も5mくらいで小さいんですけど、ナラの木がある。いろんな種類の灌木が生い茂り、ピラカンサのなかまは赤い実をびっしり。草も多い。平均で50cmくらいは、黒い豊かな土です。岡田博さん（大阪市立大学植物園長）は、「ひょっとすると、この奥は宝庫ですよ。セメント工場があるために、柴刈りも放牧もはいていない」。遠田宏さんは「まだ森林とはいえないけど、その一歩手前。土はできてますから、十分育ちますよ」。

南郊区の山は石ばかりで、植林はできない、そういわれてたんですね。私たちのプロジェクトも避けていた。ところが、こういう場所がある。生態学用語で「refuge」（避難所、隠れ場）というんだそうです。

もうちょっと奥までさぐってみることにします。（高見）

いまあぐできるGENへの協力

会員になってください！

まだ会員になっていない方、ぜひ会員になってGENの活動を支援してください。また、環境問題や国際協力に関心をお持ちの知り合いに、会報の購読などをすすめてください。

カササギの森にご参加ください！

1haの緑化費用5万円を一口として2000年秋から協力を募っているカササ

ギの森は、現在までに133haのご協力をいただきました。

カササギの森の敷地は約600ha。植樹可能な地域はおよそ半分、隣接地に拡大も可能なのでまだ余地があります。みなさんのご協力をお願いします。

緑化基金、運営カンパもとむ

金額はいくらでもけっこうです。訪日団カンパも歓迎。みなさんのお気持

ちをわけていただけると嬉しいです。

ビデオ『よみがえる森』ご購入を！

沙漠化、水不足など黄土高原の環境問題とGENの緑化協力を30分にまとめました。価格は5,000円、GEN会員価格は4,000円（送料270円別途）です。

絵はがき『中国・黄土高原』をご利用ください

橋本紘二さんの写真で制作しました。『春』『夏』『秋・冬』『緑化』の4種類、それぞれカラー8枚組、1セット（8枚）500円（送料別）です。

大同で、また会いましょう

広がってゆく“夢の森”

～夏のワーキングツアー日誌から～

今年の夏のツアーは、総勢25名と参加者がいつもより少なく、期間中雨が多かったこともあって作業が中止になったりもしました。その分、ゆったりとしたペースでひと味ちがう体験をしてこられたようです。7月26日から8月2日までのツアーでどんなことがあったのか、日誌からの抜粋と写真（参加者の藤原國雄さん撮影）でご紹介しましょう。

【7月26日（金）】

無事に大同行列車に乗りこみ、1つのコンパートメントに4つのベッド。上段の人はわずかな足がかりで上に上がらなくてはならないのにビックリ。手足をきたえておかなくては中国旅行はできないことを知りました。

みなそれぞれに収まったのになんと4号室の扇風機は回らない。むし暑くて4人ともヒューヒュー。中国風に廊下にて涼んだが部屋の中、特に上段は暑く、4人がかりで窓を開けて……解決！

列車のすれ違う音、トンネルを通る音、さまざまなすさまじい音の洪水の中、みなさんどれだけ眠れたでしょうか……。 (三原翠・会社員)

【7月27日（土）】

バスの車窓からは一見、順調に育った作物の生えた畑と緑の鮮やかなポプラ並木。「なんだ、ちゃんと緑があるのでは？」というのが素人の考え……。遠田先生をはじめ有識者の方々のお話を聞くと、「それは夏だから……」。見た目に見える緑は雑草。春にはその雑草もなく、黄土がむき出しに。そして順調に育った作物の生える畑は灌漑を施した畑とのこと。(中略)

校庭でハンカチ落としやサッカー、綱引きをみんなで楽しんだ後、リハーサルなしの人形劇です。僕は村の子どもの声。中国語で何とか……。でも、



恒例の綱引きは日本側の負け越しでした

やってる方も楽しかったです。反応はぼちぼちでしょう。しかし、村人、特に子どもは、過酷な環境の中で元気で、そしてたくましい！ 文明社会にドブリン漬かった自分が軟弱に思えました。(津坂真政・留学生)

【7月28日（日）】

9時陽高県の招待所を出発し、途中、「陽高県日奸虐殺遺跡」の看板の前を通過。 遇駕山のアブラマツ林。アマタケはありますが……

悪夢の時代のイメージが頭をよぎる。ちょうどその後タイミングよく、遠田先生の車中講話。日中戦争当時日本軍がおこなった「三光作戦」の受難の地が、これから行く天鎮県であり、昨夜宿泊した陽高県でもある。私たちは、この歴史的事実、背景を理解し、行動しなければ、本当の日中友好は実現しないと、歴史をふりかえって話をされた。同感。(中略)

午後の予定は、あいにく果樹園の地面が悪いので取りやめ、農家訪問に変更。5つの班に分れ、農家を見学。当班は、王家の主人の案内で家庭訪問。約30分、実状を聞く。帰路、隣家の民家より家にも寄れということでお邪魔する。構造、設備は似ているが、やはり、両家それぞれの個性の表現の違いがある。(那須芳磨・留学生)

【7月29日（月）】

地元の人たちと共に植樹をする。ここでは補植なので一昨日と違って適当に植える。でも日本人としては適当と言われてもとまどってしまう。まあそれが日本人の良いところでもあり、悪いところでもあるなどどうでもいいようなことを考える。



植林後に地元の人たちと綱引き大会、さすがに中国の小朋友は強い！（中略） 遇駕山植林地の見学

日本の援助が入る以前、中国独自で実施して成功した場所とのこと。とても良い風景の森が広がっている。私たちが植えた場所も将来このようになるのかと思うと、とても不思議な感じもするが大変楽しみである。

松茸が取れると聞いて目の色を変えた者が数名有り。しかし、1時間かけて戦利品なし。(岡垣誠一・公務員)

【7月30日（火）】

“カササギの森”開設から1年。どんどん青さが広がってゆく。昨年夏はただ荒涼たる砂地が広がる黄土高原の大地の典型的なすがたの広がる“森”(?)だった。本格的に緑化を拡大さ



聚楽郷采涼山での植樹作業



カササギの森のイブキ。枯れた大苗(左)と、活着した小苗(右)

せたのは今年からだそうだ。でも去年と違うことは一見してわかる。徐々にではあるが私たちの“夢の森”は広がっているようだ。(中略)

今日のメインは“カササギの森”。毎年毎年その姿は変わり、私たちはそれを感じることができません。もう少ししたら、自分で自由に大同市内からタクシーなどで行けるような、そんな気軽な森にしてほしい。そう思います。さあ、また来年、この森が見られるか。

また会おう“カササギの森”!!

(村松弘一・研究員)

その後、森の西側を見てまわる。なかでも、イブキが植えられている一帯は、大きなものを移植したところはほぼ全滅、小さな苗を移植したところは活着率が100%に近いという対照的な状況であった。遠田先生いわく、「欲張って大きなものを移植すると根が切られ、吸水できなくなり、枯れてしまう。だが、これは極めていい教訓であり、後までこのままの状態を残しておくべきである」とのこと、なるほど。(3ページの記事に関連の記述あり)

昼前まで、アブラマツの植樹作業、河北省からの出稼ぎ労働者によって整地された溝。この北側に沿って穴を掘り、砂、苗、土、マルチングのための



好奇心いっぱいの村の子もたち

草の順で穴に入れていく。うねを作ることで、人工的な北側斜面を造成、砂は発根を助け、草はビニールの代わりに土壌からの水分蒸発を押さえるだけでなく、やがて腐乱して肥料となる。(西田幸

信・大学院生)

【7月31日(水)】

最終目的地万人坑ではみな終始無言。様々な思いを感じているのだろう。言葉がでなかった。ツアー中にであった中国人の方々は私たち日本人を見てどんな思いを抱いていたのだろうと、バスに揺られながら考えてしまった。しかし、高見さんの今も残る日本人への恨みを緑化活動がいやしてくれることもある話を聞き感動した。(中略)

残り2日。今から寂しくなるほどこの旅は私にとってとても大切なものとなった。みんなと出会って一緒に活動ができたことは忘れられないものとなるだろう。(重松寛子・団体職員)

【8月1日(木)】

一番楽しかったのがホームステイで、この1週間であげた料理のなかで一番おいしい料理を作ってもらえたり、近所の子どもたちに折紙でつと風船の作り方を教えてあげたのがすごく楽しかったです。子どもたちは折紙を知らなかったのも、とても喜んでくれました。ホームステイ先から帰る時に、その子たちと離れたくないと思いました。

一番心をうたれたのは万人坑で、自分の生まれた国である日本が中国の人たちを働かせて生きうめにしたことを知らなかったのも、すごくショックで泣いてしまいました。また、今まで世界史や日本史を、「適当でいいや」みたいな甘い考えで勉強してきたことを反省しました。これか

らは歴史をしっかりと勉強して、日本が中国にしたことや、戦争の無意味さ、みにくさを勉強しようと思いました。ホームステイ先のおばあちゃんもその生き埋めのことを知っているだろうけど、おいしいごはんを作ってくれて、ふとんもしいてくれて、ずっと笑顔で接してくれたのはすごく嬉しかったです。これからは人の命を大切にしながら生きていきたいと思いました。(谷口真理・高校生)



万里の長城をバックにみんなで記念写真

【8月2日(金)】

初めての中国は色々なことがあり過ぎて、心臓がバクバクしっぱなし。まず大同の農村は貧しくて閉鎖的なところだと思っていたら、貧しいところはたくさんあるけど、村の人たちはそれをちっとも感じさせない笑顔をしていた。初めて会う私をあんなんにも明るく優しく出迎えてくれたことがホントに嬉しい。特にホームステイをしたおうちでは、な～んでこんなに優しくて明るいんだろうってくらい良くて、すごい居心地が良かった。(中略)

そして私が中国に行き変わったことは水へ対する認識! いままで無駄づかいをしていたわけではないけど、それでも見直したら必要以上に使っていたんだな～とわかってきた。私はまだまだ大きなことをする力がないから、小さいことしかできないけど、でもこういう小さいことが実は大きいことなんだらうなあ。(小川結希・大学生)

黄土高原史話 <9>

「東農西牧、南稻北麦」というけれど

谷口 義介 (摂南大学教授)

春・夏のワーキングツアーでは、夜行列車のコンパートメントや農家に泊まるときの4人1組、ホテルや招待所の場合の2人1組、すべて相手が変わります。毎夜組合せを換えることで、相互の理解と全体のまとまりを、という深謀遠慮からでしょう。

「クラス仲間はいつまでも」の歌詞が通ずる世代のツアー仲間から、暑中見舞いを兼ねて質問がひとつ。

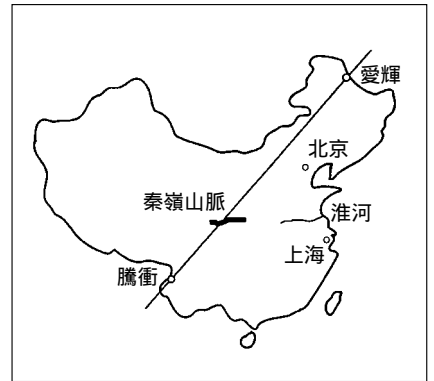
「中国の南・北を秦嶺(陝西省) - 淮河(江蘇省)ライン、年間降雨量800ミリで分かつことは納得。では、東・西はどのあたりで？」

北は黒龍江省の愛輝(アイグン、現愛輝)と南は雲南省の騰衝を結んだ線、だいたい年間降雨量400ミリラインに相当します。このラインの西側は雨が少ないので牧畜区、反対の東側は農業区。さらに農業区は秦嶺 - 淮河ラインで南の水田稲作と北の雑穀畑作に分かれるというわけ。

これを総称して「東農西牧、南稻北麦」といいますが、この区分だと黄土高原はおおむね北麦地帯に入ります。ただし「牧」と「麦」の間には、ムギより乾燥に強いアワ・キビなどを栽培。また黄土高原の村では、経営を補完するためヤギ・ヒツジが数千年前から飼われていたことは、前回述べたとおり。

なお、黄土高原でも条件に恵まれた区域では、稲作もじゅうぶん可能。今年の8月下旬、山西省中部の太原市郊外で稲穂の垂れかかった水田を見ました。ここよりずうっと北西の銀川市(寧夏回族自治区)の手前では、たしか6年前の7月下旬、水田に稲の葉が青々。まさしく「塞上江南」のいわれを実感した次第です。

もちろん、大地はノッペラポーの真っ平らではなく、山あり川あり、丘陵・盆地あり。とうぜん作物の分布には、高低差や水利条件も考慮に入れなくてはなりません。



たとえば、山西省北部の場合、盆地には山からの水が集まってくるのでトウモロコシ・ヒマワリ・コーリヤンを、丘陵地ではアワ・キビ・ジャガイモを栽培、それより上の山地だとエンバク・ソラマメしかできません。

つまり、平らな地図の上に定規で線を引くような区分けは、とうてい無理。あくまで大雑把な目安程度、とご理解を。

ちなみに、年間降雨量400ミリラインと800ミリラインの交点は甘肅省東部。しかし地政学的にいうと、東・西の境は、陝西省を東に通じこした河南省西部、“箱根の山もものなら”ない天下の峻=函谷関でしょうか。

大同におけるGENの緑化協力-3-

小学校附属果樹園

1993年の秋です。当時の大同側の責任者、劉懐光さんと靈丘県に行きました。「自分には別の用事があるので、高見は休んでいてくれ」と彼がいいいます。どこにいくのか聞くと、「希望工程で貧困な村の教育を支援する。その下見だ」というのです。そういう機会を逃すわけにはいきません。ついていきました。

それほど貧しい村をはじめてみました。とくに学校がひどい。古びて、屋根が波打っています。零下20度にもなるのに、窓は障子張り、それも穴だらけです。梁から裸電球が1個ぶらさがっているだけで、教室は暗い。1年生から4年生まで40人ほどが1つの教室で勉強しています。

それでも、学校にこれる子はいいんですよ。これない子がいます。そうい

う子に「いきたくないのか？」ときくと、うつむいて、泣き出します。

なにかできないかとその夜、考えました。思いついたのが、小学校に附属果樹園をつくることです。収穫できるようになったら、収入の一部を学校に回してもらう。持続的な教育支援が可能です。翌朝劉懐光に話すと、即座に賛成してくれました。いろんな問題がありました。実現にこぎつきました。

その村では、果樹園づくりの賃金をプールして、校舎を建て替えました。給水設備をつくった村もあります。

この果樹園づくりで、地元との関係はずっと深まりました。植樹作業に子どもが参加するようになったのは、それからです。村中の人々が参加して、お祭りのようです。

と同時に、植えたあとの管理のむず

かしさも、痛感させられました。山に植えるマツの比ではありません。冬から春先にかけてのノウサギ、夏の虫害、接ぎ木に失敗して台木の伸びた「二セ苗」……。よく育っていた6万本、80haのアンズが、1年で全滅したこともあります。

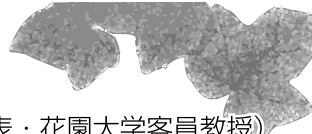
そのおかげで、大同事務所も私たちも、必死に勉強したんです。自然条件や技術の改善の以前に、解決しなければならぬたくさん問題があることを知りました。

もうこれまでに、延べ50以上の村に建設しました。渾源県呉城郷はその後もアンズを植えつづけて大成功し、「退耕還林」の全国モデルになりました。靈丘県上北泉村は60haにもなり、村全体の生活向上に役立っています。

黄土高原の問題は「環境破壊と貧困の悪循環」だと以前に書きました。この小学校果樹園は、処方箋の1つです。

(高見)

植物を育てる (18)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

種の多様性

植物を育てるための基本的な知識として、種の多様性について数回述べてきたが、今回で一応の区切りにしたいと思う。

種子のもつ種の多様性

挿し木などのクローン苗が、環境を変えたとき全滅してしまうのにもかわらず、種子から育てた実生苗が生き残った例として、コスタリカで経験したことがあるので紹介する。コスタリカは北緯5度前後の完全な熱帯なので、ほぼ1年を通じて日照時間は12時間前後である。温度は海拔2,000m付近は年平均23 だった。この場所にムクゲの挿し木苗100本と種子100粒を植えた。ムクゲは温帯の植物だから多分よく育つことはないと考えていた。1年後の成績を図に示す。すなわち、挿し木苗は20cmほどしか伸びず、開花せず、3年後に全滅したのだが、種子をまいた実生苗はその98%が枯れ、わずか2%

が大きく育ち開花した。

ムクゲには短日条件でも生き残る遺伝子が2%あったのだ。わずか2%でも、生き残った株から落ちる2代目種子はほとんど大部分が成長できるわけだから、急激に環境が変わるとクローンでは生き残りの遺伝子がなければ絶滅し、種子ではきわめてわずかながら生き残り、そしてじょじょに増えて子孫が維持されるのだ。

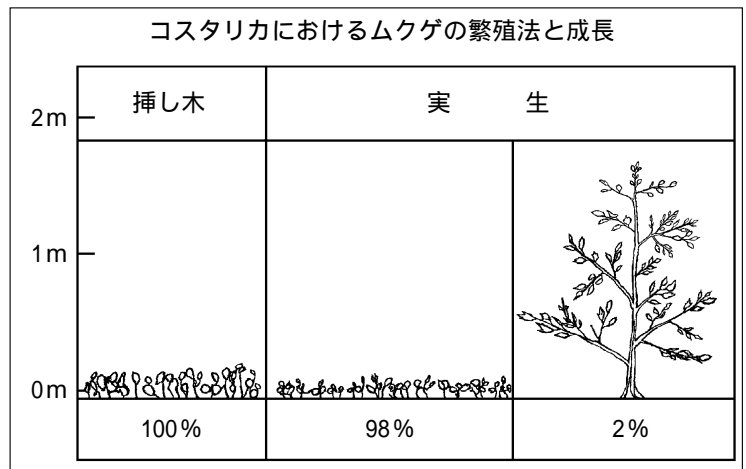
個体変異
イネやムギのような作物は種子から育ててもよく揃っている。これは長年にわたって人間に都合のよいように

遺伝子を選抜して固定した結果である。しかし、野生の植物では種子から育てると個体間がきわめて不揃いだ。これを個体変異とよんでいる。個体変異の幅が大きいほど生き残りの確率は高くなり、幅が狭いほど環境条件変化のときの生き残りの確率が下がる。コメやムギは純系性であり、めったに種をまかないムクゲは雑種性であったわけだ。

種子から育てよう

食糧を確保するための栽培をのぞき、環境をよくするための植樹では、挿し木などのクローン苗でなく、種子をまいた苗を植えるようにしましょう。

コスタリカにおけるムクゲの繁殖法と成長



関東ブランチから ～秋のイベントに参加します～

秋のイベントシーズン、関東ブランチが2つのイベントに参加します。国際協力フェスティバルには今年が初参加、環境フェスタくにたちは2回目。写真パネルの展示にくわえて、人形劇など独自の楽しい工夫があります。お近くの方は、ぜひお立ち寄りください。

国際協力フェスティバル

開催12回目をむかえる「国際協力フェスティバル2002」が10月5日(土)6日(日)に開催されます。

会場：日比谷公園(東京都千代田区)

時間：10時～18時頃

【国際協力フェスティバル2002とは】

国際協力とはなにかを知ってもらい、国際協力への理解と参加を広める目的で、NGO・政府・国際機関・自治体・民間団体など、約200団体が参加する日本最大の国際協力イベントです。

NGOゾーンでは、約120団体の出展ブースを中心に、NGO案内ツアー、エスニック料理屋台、ミニステージ、ワークショップなど多くのプログラムがおこなわれます。

楽しいプログラムが満載です！ぜひ遊びにいらしてください！

問合せ先：(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)(担当：河合、中川) TEL. 03-3294-5370 FAX. 03-3294-5398 e-mail: icf2002@janic.org URL <http://www1.jca.apc.org/icf/> 環境フェスタくにたち

国立の市民団体が参加して、リサイクル品販売、パネル・環境グッズの展示、食品販売などがおこなわれます。

日時：10月12日(土)10時～16時
場所：くにたち市民芸術小ホール前(国立市富士見台2-48-1 TEL 042-

574-1515。JR国立駅南口バス乗場4番から立川バス、矢川駅、国立営業所又は都営いずみ2丁目行きで「市民芸術小ホール・総合体育館前」下車、またはJR矢川駅と谷保駅の間)

主催：国立市・環境フェスタくにたち実行委員会





2002 中国写真展

黄土高原、長江三峡、内蒙古高原

今年春の黄土高原ワーキングツアーに参加された櫻井秀三さんが、写真展を開催されます。大同のワーキングツアーでの写真(3月)をはじめ、来年には水没する長江三峡の遊覧(5月)、内蒙古草原での自転車と乗馬の旅(7月)と、南船北馬に緑化活動を加えた盛りだくさんな内容です。

日時：10月23日(水)～26日(土)
10時～18時

場所：ギャラリーかぶらき(第一勧銀のある四ツ谷駅前ビルB1 TEL. 03-5379-1841 JR、地下鉄丸の内線・南北線「四ツ谷」駅四谷口下車1分。入口はしんみち通り)

心をつなぐ悠久のしらべ
中国少数民族地域の子どもたちへの
第6回 教育支援コンサート
揚琴と中国琵琶

このコンサートの収益は、関西日中交流懇談会が教育支援に取り組んでいる中国湖南省桑植県、永順県、寧夏回族自治区固原県の教育事業のために活用されます。

日時：11月9日(土)14時～(開場13時30分)

場所：豊中市立ローズ文化ホール(阪急宝塚線「庄内」駅徒歩8分。豊中市野田町4-1 TEL. 06-6331-7961)

演奏：沈兵(揚琴)/葉衛陽(琵琶)
賛助出演：千里少年少女合唱団/豊中ジュニア・コーラス

入場料：協力券=2,500円 当日=3,000円(小・中・高・留学生、障害者=1,500円)

主催・前売り・問合せ：関西日中交流懇談会(TEL./FAX. 0797-88-2240

e-mail : kansainc@ch.mbn.or.jp)

編集後記

少し前ですが、「黄砂予報」がはじまるという新聞記事に思ったことです。

子どものころは「黄砂予報」はもちろん、「紫外線情報」も「花粉情報」もありませんでした。春を待ちかねて表に飛びだし、夏には真っ黒になって遊びました。最高気温が32 を超える日は数えるぐらい。アトピーもヒートアイランドも聞いたことさえなく、エアコンなんて必要ありませんでした。ほんの30年ほど昔の話です(大昔?)

やがてオゾンホールが発見され、お日さまの光が有害といわれるようになりました。植えっぱなしで放置されたスギ林と大気汚染が花粉症の大発生をまねきました。

春霞と呼ばれ、春の到来を告げる使者だった黄砂が、日本でも、大同や北京でのように猛威をふるう日は、来ないとは思うのですが.....。(東川)